

学習における日常性と非日常性 ワークショップ論再考

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

本論文では、集団の相互作用に参加し、人格形成とコミュニケーション能力向上へと結びつくグループワークの教育的可能性について考察する。第一章では、ワークショップ形式のグループワークに注目し、その課題発見・自己発見のための学習契機としての性質をとりあげる。ワークショップのキーワードは「参加」「体験」「相互作用」である。このうち「体験」については、心理学者コルブの体験学習論をとりあげ考察する。ここでは、体験・ふりかえり・理論化・試行という循環のなかで学習が起こることが明らかにされている。

第二章では、非日常的な学習契機の対比で、日常性における学習として、状況的学習という「正統的周辺参加」をとりあげる。ここでは、文化的実践共同体に参加していく過程で学習がなされるとしている。正統的周辺参加とは、新参加者が共同体に散在する学習資源にアクセスし、熟練者となっていく学習過程である。

第三章では、これらの学習の様態である非日常性と日常性を考察する。日常性とは、連続的で、人びとが自明と感じている事物から構成されている。日常性は個人の生において「至上の現実」となっている。日常性において、人は特定の世界を信じており、それが世界に自明性を与えている。これについては、バーガーとルックマンの議論を参考にする。非日常性については、実存哲学の視点から考察する。非日常性は、日常的現実のなかへ突如としてやってくる飛躍の非連続的瞬間であり、人が本来的な実存に投げ返される経験である。その瞬間、それまで自明とされてきた価値が崩れ去り、自明性により見えなくなっていた本来性が見えてくる。日常性から断絶されている非連続的事象は、教育者がそれを意図して操作できるものではない。むしろ教育者は学習者がその経験を最後まで耐え抜くことを見守るのみである。非日常的経験においては、人が非日常的世界に没入してしまう危険性がともなう。そのため、非日常的な体験を日常の取り組みへと結びつけることが必要である。

第四章では、以上の考察をふまえて、日常性と非日常性との統合の必要性を、ボルノー、真木悠介の考えを参考に論じる。そして最後に、それをワークショップ論に結びつけ、ワークショップが日常的現実にも根づき、真に創造的な契機となる過程を論じる。